

「水槽の中の脳」と唯識における生の在り方

近藤伸介

一 形而上学的実在論とそれに伴う懐疑

ヒラリー・パトナム Hilary Putnam が一九八一年に出版した『理性、真理、及び歴史 Reason, Truth And History』は、彼が従来からの立場であった形而上学的実在論 metaphysical realism を捨て、新たに内的実在論 internal realism を自らの立場として表明した「転向の書」として知られる。パトナムはその後、一九九九年に出版した『三つ撚りの綱——心、身体及び世界 The Threefold Cord: Mind, Body, and World』において、内的実在論から自然な実在論 natural realism へとさらなる転向を表明したようだが、そうした彼の思想的な変遷を論じること¹⁾は、本稿の意図するところではない。ただ、パトナムの従来¹⁾の立場であった形而上学的実在論については、本稿で論じる「水槽の中の脳 brains in a vat」(以下、水槽脳と略)という思考実

験が提示された背景として説明しておく必要がある。最初に見ておきたい。

形而上学的実在論(あるいは外在主義 externalism)とは、世界を心から独立した対象の総体と見做す立場である。この立場では、我々が存在しようとしまいと、世界は変わらず存在し続ける。そして世界が我々の心から独立に存在することから、形而上学的実在論に身を置く限り、「私たちは本当に世界を知り得るのか」という疑問が常に残ることになる。世界と我々の心が切り離されている以上、我々が知覚し、認識している世界が本当に真の世界と一致しているのかという点について、形而上学的実在論者は常に懐疑を抱く余地があるのである。このことについて、パトナムは次のように述べている。

【1】伝統的に実在論者たちは、真理は理想化された正当化可能性 justifiability をさえも超える、と主張してきた(な

ぜなら我々は「本当は」皆、邪悪な鬼 evil demon に騙されていられるかもしれないし、我々は本当は、水槽の中の脳であるかもしれないのだから等々)。(RR, p.85)

ここに述べられた我々を騙す「邪悪な鬼」が、デカルトが『省察』の中で提示した懐疑の方法を意味していることは間違いない。デカルトはその中で、確実な真理に至るための方法として、この上ない力を持ち、かつ狡知にたけた「邪悪な霊 senius malignus」があり、その霊が常に全力で我々を欺いているのかもしれないという想定を立てる。すなわち、私が知覚する一切の外的な事物は、実は邪悪な霊によって見せられている夢に過ぎず、私の手や目や肉や血も、すべて邪悪な霊によって作られた幻想に過ぎず、実は私は身体を持たず、よっていかなる感覚も持たない者であるかもしれない、とそこでは想定される。まさに徹底した懐疑である。本稿で取り上げる水槽脳も、この邪悪な霊による欺きと並び、形而上学的実在論から提示され得る懐疑の方法としてここに述べられている。⁽²⁾パトナムは、『理性、真理、及び歴史』において、この水槽脳の仮説を提示し、それを論駁することで、形而上学的実在論を批判するのであるが、その論駁の仕方の妥当性を検証することは本稿の意図するところではない。ここではまず、水槽脳という極めて特殊な生の在り方に注目し、その特徴を明らかにしたい。というのは、水槽の生の在り方が、大乘仏教から生まれた哲学である唯識 vijñapti-mātrata が語る生の在り方と基本的な部分で共通して

いると思われるからである。本稿は、水槽脳と唯識という、成り立った時代も地域も全く異なる両者を比較し、その生の在り方の共通点及び相違点を明らかにすることで、両者にとって新たな知見が開けることを期待するものである。

二 「水槽の中の脳」という思考実験

それではまず、水槽脳という思考実験から見ていきたい。『理性、真理、及び歴史』の第一章には次のようにある。

【2】ある人(あなた自身と考えてもよい)が邪悪な科学者による手術を受けたと想像せよ。その人の脳(あなたの脳)は身体から取り外され、脳を生かしておく培養液の入った水槽の中に置かれている。神経の末端は超科学的コンピュータに接続され、そのコンピュータは、脳の持ち主にすべてが完全に普段通りだという幻想を抱かせる。(脳の持ち主には)人々も、諸々の対象も、空なども、存在するように思われる。しかし本当は、その人(あなた)が経験しているすべては、コンピュータから神経末端に伝わる電子インパルスの結果である。そのコンピュータは非常に賢く、もしその人が手を上げようとすると、コンピュータからのフィードバックは、彼に手が上げられるのを「見」たり、「感じ」たりさせるであろう。さらにプログラムを変えることで、邪悪な科学者は彼が望む、どんな状況や環境も犠牲者に「経験」させる(あるいは幻覚を

起こさせる)ことができる。彼〔「邪悪な科学者」は脳手術の記憶を消すこともできるから、犠牲者〔「脳の持ち主」は自身が常にこの環境にいたように思うであろう。(RTH, pp.5.36-6.14)³〕

ここに記された思考実験において、水槽脳が置かれている状況の要点をまとめると次のようになる。

(1) 我々は水槽の中で超科学的コンピューターに接続されている脳である。

(2) 水槽の外には邪悪な科学者がおり、彼はコンピューターを操ることで、思うままに我々の幻想を操ることができる。

(3) 我々は自分自身が水槽脳であることを知らず、コンピューターから送られてくる電気刺激によって脳が作り出す幻想を見せられながら、自分では身体を持ち、水槽の外で、普通に生活を送っていると信じている。

ここで重要なことは、水槽脳が自分では現実世界を生きていると信じながら、実は幻想世界を生きているという、そうした生の在り方である。この状況において、水槽脳は自ら水槽を脱出することはできず、ただ邪悪な科学者が送る電子インパルスによって作り出される幻想を見せられ続ける他はない。パトナムはこのような状況を設定した上で、次のような問を立てる。

【3】もし我々がこのように水槽の中の脳であるとしたならば、我々は我々〔自身〕が〔現実世界において実際に〕水槽の中の脳である、と言ったり考えたりできるであろう

か。(RTH, p.7.20-21)

この問いに対してパトナムは「いや、できない」と答え、さらにそこから、我々が現実に水槽脳であることはあり得ないと結論する。そこで彼が用いた論法は因果関係の欠如による指示の不可能性である。パトナムは次のように述べている。

【4】ある種の事物、例えば樹木、あるいはそれらを記述し得る事物との因果的相互作用 causal interaction を全く持たない人は、それら〔樹木などの事物〕を指示することができない (RTH, pp.16.34-17.1)

語や記号の使用者が対象との因果関係を全く持たないとき、その使用者は対象を指示することができない、とパトナムは言う。これに従えば、ある語や記号が世界内の対象を指示するためには、その使用者が指示したい対象と因果的相互作用を持つことが条件となる⁴。このことを水槽脳に当てはめてみよう。水槽脳が認識している世界は、電気刺激によって人工的に作り出された、現実世界とは何の結びつきも持たない仮想現実である。よって、その仮想現実の中で水槽脳が語や記号を用いて何らかの対象を指示したとしても、それらの語や記号は現実世界の事物といかなる因果的相互作用も持つことはなく、よってそれらが指示する対象は飽くまでイメージ上の事物でしかない。よって、もし水槽脳が語や記号を用いて「我々は現実世界において水槽脳であるかもしれない」と思考したところで、それらの語や記号ははじめから現実世界を指示する条件を欠いている

ため、その思考内容の真偽値が真となることはない。そこからパトナムは、我々は現実世界において水槽脳ではあり得ない、と結論する。この論法が果たしてどこまで妥当であるかはともかく、パトナムは形而上学的実在論から提示され得る水槽脳という懐疑を論駁することで、この立場を批判する。彼の言葉を見てみよう。

【5】また外在主義（「形而上学的実在論」の哲学者に対して私が提起した問題は、もし彼が〈水槽の中の脳〉であるならば、（彼の見解では）真理と指示がそれに依存する対応関係そのものが、彼にとって論理的に利用できないということである。したがって、もし我々が〈水槽の中の脳〉であるならば、括弧で括られた意味での《我々は水槽の中の脳である》を除くと、我々は我々が〔現実〕に〈水槽の中の脳〉であると考えることができない。そしてこの括弧で括られた思想は、それを真にするような指示の諸条件を有していない。（RTH, pp.50:35-51:2）

形而上学的実在論によれば、語や記号は世界内の対象と一致することではじめて真となる記述を形成するが、水槽脳はそもそもその世界と因果関係を持たないため、語と対象との普遍的な対応関係が成立する余地はなく、よってその記述や思考の真偽値は常に偽とならざるを得ない、とパトナムは言う。そしてこのように形而上学的実在論を批判した上で、パトナムは当時の自らの立場である内的実在論⁶⁾を表明するのであるが、そこに

は立ち入らず、ここではただ次の二点を確認しておきたい。一つは、もし我々が水槽脳であったなら、我々は邪悪な科学者が操る幻想から逃れることはできず、よって幻想世界を現実世界と信じることになるということであり、もう一つは、パトナムが因果関係の欠如による指示の不可能性から、我々が現実に水槽脳ではあり得ないと結論したということである。

三 唯識が語る三種の認識と二分依他

それでは次に、唯識における生の在り方について見てみたい。唯識とは、現象世界の一切はただ識 *vijñāna*（表象、心の現れ）に過ぎないという思想である。ここでは我々が認識する一切の対象は、自己の存在基盤である深層心理の「アーラヤ識 *ālaya-vijñāna*」に蓄積された「種子 *bīja*」^{しょうじ} Ⅱ 潜勢力が表層心理として顕現したものとされ、心の外に一切の認識対象を認めない。「諸法無我」の立場を取る仏教では、現象世界に一切の実体を認めていないため、仏教哲学である唯識も、現象世界の一切を心が生み出した表象に過ぎないと説明する。そして唯識思想の大成者の一人であるアサンガ *Asaṅga*（無著、無着）は、『攝大乘論 *Mahāvāyana-saṃgraha*』の中で、我々の認識には次の三種があると述べている。

【6】それは要約すれば三種であり、他に依る相と、妄想された相と、完全に成就された相である。（D.4048, i.13:3,

P.5:49, ii.14a6-7）

これらの相は、我々の認識の在り方を三種に分けて説明したものであり、「三相 tri-laksana」あるは「三性 tri-svabhava」と呼ばれるものである。このうち「他に依る相 paratantra-laksana」とは、玄奘によって「依他起相」と漢訳されたものであり、文字通り「他に依存して生起する認識の在り方」ということである。仏教では基本的に、一切の存在は因縁によって生じるとされ、他に依存しない自立的な存在を認めないため、依他起相は認識の最も基本的な在り方と言える。アサンガは三相の関係について、この依他起相を中心に据え、これを基底として他の二相が生じるという「二分依他」と呼ばれる解釈をしている。これは、依他起相をあらゆる認識に共通する基本的な在り方とし、さらにそこから「妄想された相 parikalpita-laksana」＝「遍計所執相」と「完全に成就された相 parinipanna-laksana」＝「円成実相」という二種類の認識が成立するとする解釈である。このうち遍計所執相について、『撰大乘論』は次のように述べている。

【7】その中で、妄想されたものの相（＝遍計所執相）とは何か、というなら、それはたゞ識（nam par rig pa）のみで〔外界の〕対象が存在しないにもかかわらず、まさに対象が現れることである。（D.4048, ri.1362, P.5549 ll.14b7）

我々は日々、様々な対象を認識するが、我々が外界に実在すると考えるそれらの対象は、実は存在しておらず、ただ妄想として顕現しているのみであるという。『撰大乘論』は、こうし

た妄想を生むのは分別の働きであると説明する。

【8】また分別（kun tu rog pa/sankalpa）は、どのように分別するのか。（中略）名前を所縁（＝対象）として〔分別するのであり〕、また〔それを〕他に依るといふ実存（ng bo nyid/svabhava）〔＝依他起性〕の上に相として把握し、それを見て執着し、（中略）対象が存在しないのに、存在すると誤認すること（sgro 'dogs pa/adyaropa）によって分別するのである。（D.4048, ri.1654-6, P.5549 ll.18b1-4）

分別とは、他に依存して生じる表象を独立した対象として認識し、執着する心の働きであり、それによって外界の対象が実在するという妄想が生じる。先にも述べたが、唯識では一切の認識はアーラヤ識の種子から生じるものであり、心の外にはいかなる対象も認めていない。これを「唯識無境」と言う。しかし我々凡夫はそれに気づかず、分別の働きによって、外界の対象が実在すると信じている。遍計所執相とは、そうした凡夫の誤った認識をさす。

一方、円成実相について『撰大乘論』は次のように述べている。

【9】もし識（nam par shes pa）が無分別智（nam par mi rog pa/nirvikalpa-jñāna）の火によって焼かれたならば、その識はありのままの（yang dag pa/tathata）真如）完全に成就された実存（＝円成実性）として現れるのであって、誤った妄想された実存（＝遍計所執性）として現れるので

はなす。(D.4048.r.20a3, P.5549.i.22b4-5)

これによれば、分別による認識を放棄して、無分別智によって対象を把握するとき、そこで得られる認識は、ありのままの、完全に成就されたもの、すなわち円成実相であるという。また、次のようにも述べられる。

【10】その中で、完全に成就された相とは何か、というなら、それはかの他に依る相(「依他起相」)そのものにおいて、かの対象としての相がまさに絶対的に無になること(graṇ med pa/tyanta-abhāva) である。(D.4048.r.13b2-3, P.5549.i.14b7-8)

これによれば、完全に成就された相＝円成実相とは、依他起相において、対象の相、すなわち対象の姿形が絶対的に無になることであるという。『撰大乘論』は、さらに次のように言う。

【11】(「)において、智慧を有し、寂靜の獲得を成就した者にとっては、すべての法に思考を働かせるとき、そのように諸々の対象が現れるが故に、そして無分別智が作用しているとき、一切の対象は現れないが故にまた、対象が存在しないことが認知される。それ(「対象」)が存在しないことにより、識は存在しない。(D.4048.r.16a3-4, P.5549.i.17b7-8)

我々が認識する一切の対象は、ア－ラヤ識の種子に依存して生じる依他起性を本性とする識＝表象に過ぎないため、分別による対象の区別・分析が消滅したとき、あらゆる外界の対象は

消滅するという。すなわち無分別智が働くとき、ありのままの世界＝円成実相が顕現し、その結果、外界の非存在が明らかになり、そこから識＝表象もまた非存在であることが明らかになるといふ。こうした無分別智によって把握される世界こそ、唯識の語る真の世界であり、真如である。

四 水槽脳と唯識的生における共通要素

それでは以上の考察に基づき、水槽脳と唯識における生在の在り方の共通点について考えてみたい。

アサンガの二分依他の考え方に従えば、我々凡夫が認識している世界は分別知によって作り出された幻想世界＝遍計所執相であり、それは無分別智によって開示される真の世界＝円成実相ではあり得ない。よって、我々凡夫は水槽脳と同様、幻想世界を現実世界と信じ、それに疑いを持つこともなく生活していることになる。唯識には「邪悪な科学者」という我々の幻想を操る他者は存在しない。しかし分別という迷いの認識作用を我々は生まれつき持つており、解脱という特殊な場合を除いて、我々の認識は分別的作用を逃れることはできない。すなわち我々は、生まれながらに自ら幻想を生み出し、その幻想世界＝遍計所執相を生きることを余儀なくされているのである。これは水槽脳が置かれている状況と酷似している。唯識が語る我々凡夫の生は、円成実相という真の世界を知ることなく、分別によって作り出された幻想世界を現実と信じて生きていると

いう点で、邪悪な科学者が操る幻想世界を現実と信じて生きている水槽脳と等しいのである。そしてもう一つ、幻想世界とは別に、真の世界が存在することも両者に共通している。唯識では、幻想である遍計所執相の対極に円成実相が存在するし、水槽脳が幻想を見ている水槽の外には現実世界が広がっている。解脱によって開かれる円成実相と水槽の外に広がる現実世界、それらが両者にとつての真の世界である。

以上、水槽脳と唯識が語る生の在り方の共通点は次の通りである。

(1) どちらの場合も、人々あるいは脳たちは、ともに自分が現実世界を生きていると信じているが、実際は幻想世界を生きている。

(2) どちらの場合も、人々あるいは脳たちが生きている幻想世界とは別に、真の世界が存在する。

水槽脳と唯識の生は、少なくともこの二点を共有しており、両者は基本的な生の在り方において共通していると言ってよいであろう。水槽脳という二〇世紀の科学文明を象徴するような思考実験と、唯識という三・四世紀頃に北インドで成立した仏教哲学が、時代・地域の隔たりを超えてほぼ同様な生の在り方を語っているということは、筆者にはとても興味深いことのように思われる。

五 真の世界への到達

最後に次の間について考えてみたい。それは、唯識における生は結局、水槽脳と何ら変わらないのか、という問である。両者が基本的な生の在り方として共通していることはすでに見たが、それでは唯識が語る我々凡夫の生は、果たして水槽脳と何ら変わらず、それを超えるものではないのであろうか。結論から言うと、両者には決定的な違いがあり、よって唯識においてもパトナムの結論と同様、やはり我々は水槽脳ではない、ということになる。両者の決定的な相違は、自らが生きている幻想世界を打破し、自力で真の世界に到達できるか否かという点にある。まず水槽脳にとつての真の世界とは、水槽の外に広がる現実世界である。水槽脳は脳以外に身体を持たないため、当然のことながら自力で水槽を脱することはできない。またもし誰かの助けによって水槽の外に出られたとしても、脳だけでは生きられないので、さらに身体を与えてもらわねばならない。すなわち、水槽脳が幻想世界を脱し、水槽の外に広がる現実世界に到達するためには、まず他者の力を借りて水槽の外に出してもらい、さらに身体を与えてもらわねばならない。従って、水槽脳が自力で現実という真の世界に至ることは不可能である。一方、唯識にとつての真の世界とは、円成実相の世界である。そして唯識では、たとえ非常に困難であっても、修行によって煩惱を絶ち、解脱することで、遍計所執相を脱して円成実相に

至ることが可能である。我々は解脱によって、自らの力で幻想世界を抜け出し、真の世界へと到達することができるのである。このように両者は、真の世界への到達可能性という点で決定的に異なっている。よって唯識における生は、基本的なレベルで水槽脳と共通しているとしても、決して水槽脳そのものではない。パトナムが因果関係の欠如による指示の不可能性から、我々は水槽脳ではあり得ないと主張したのに対し、唯識は自力での解脱可能性をもって、我々は水槽脳ではないと主張し得るのである。

(1) パトナムの思想的変遷については、パトナム「心・身体・世界三つ撚りの綱／自然な実在論」（野本和幸監訳、法政大学出版局、二〇〇五年）に収録された関口浩喜氏による解説「新たなパトナム」を参照のこと。

(2) 水槽脳は、懐疑の方法として、デカルトの邪悪な霊を用いた方法的懐疑ほど成功していないという指摘がある。それは水槽脳の仮説が、はじめから外部世界を前提しており、よって外部世界の存在を疑っていないことによる。邪悪な霊が常に我々を欺いているのかもしれないと想定する場合、その疑いに制限はなく、よって外部世界の存在そのものも疑われることになる。しかし水槽脳の思考実験の場合、水槽の外に広がる外部世界や水槽の外で幻想を操る邪悪な科学者の存在については疑う余地がなく、それ故、懐疑の方法として、水槽脳はデカルトの方法的懐疑より不徹底であると指摘される。詳しくは、飯田隆「悪霊とマッド・サイエンティスト」湯川佳一郎・小林道夫編『デカルト読本』法政大学出版局、一九九八年、二四九―二六〇頁）を参照のこと。

(3) パトナム及びアサンガの引用の訳文については、野本和幸氏らに

よる『理性・真理・歴史』（法政大学出版局、一九九四年）及び長尾雅人氏による『摂大乘論 和訳と注解 上』（講談社、一九八二年）という優れた翻訳がすでにあるため、それらに基づき、そこに手を加える形で作成させていただいた。もし至らない点がある場合は、すべて筆者の責任である。

(4) 飯田隆氏は注(2)の「悪霊とマッド・サイエンティスト」の中で、「私は邪悪な霊に欺かれている」と私が考えるとき、その真偽はどうなるのだろうかと問い、パトナムの指示の理論に疑問を呈している。この場合、パトナムの理論に従えば、我々は邪悪な霊と因果の相互作用を持たない限り、邪悪な霊を指示できないことになり、よって邪悪な霊についてのあらゆる記述は常に偽となってしまう。飯田氏はこのことを指摘し、「パトナムの論法はここでは適用できないと結論すべきである」と述べている。

(5) 指示の不可能性から、我々が水槽脳ではあり得ないと結論するパトナムの主張には、注(4)の飯田氏の見解の他にも多くの批判的な論文が書かれているようだが、それらをフォローすることは、残念ながら門外漢の筆者の手に負えることではない。ただ批判の一つの例として、もし我々が人生のある時点で脳を取り出され、水槽脳になったのだとしたら、少なくともそれ以前に我々は現実世界と因果関係を持っていたのだから、水槽脳を用いる語や記号が現実世界の対象を指示できないとするパトナムの主張は妥当性を欠くのではないかと、というものがある。

(6) 内的実在論（あるいは内在主義 internalism）とは、心から独立した対象の存在を否定し、我々が概念図式 conceptual scheme あるいは記述図式 scheme of description を導入することで、初めて認識対象も現れるとする立場である。この立場では、各自の概念図式の上に対象も語や記号も成立するため、心から独立した世界認識は存在せず、パトナム自身の言葉によるなら「心と世界とは共同して心と世界とを作り上げる (the mind and the world jointly make up the mind and the world)」(RTH, preface) と主張している。

語や記号の真偽値についても、内在主義では概念図式の内部でしかその真偽を問うことができない。我々は、自身の概念図式を超えて対象あるいは世界を認識することはできず、この図式が我々の認識の限界となる。パトナムは次のように述べている。

私自身のような内在主義者 *internalist* にとって、状況は全く異なる。内在主義の視点においてもまた、記号は、それらがどのように、また誰によって使用されるのかとは独立に、本来的に対象に対応するのではない。しかし、使用者の特定の共同体によって特定の仕方¹で現実²に使用される記号は、それら使用者たちの概念図式の内部では特定の対象に対応し得る。「対象」は概念図式と独立には存在しない。我々が何らかの記述図式を導入するとき、我々は世界を諸対象へと切り分けるのである。対象と記号は、同様に記述図式に内在的であるため、何が何に一致するかを述べる³ことが可能なのである。(RTH, p.52, 1-11)

- (7) 『撰大乘論』では、「依他起相」について次のように説明している。「依他起相は」自己の熏習である種子から生じるのであるから、それゆえに、「因」縁という他なるものに依るのである。「また」生じてからも、一刹那より長く自身で存続できないから、他に依ると名づけられる。(D4048.r1.16a5, P5549.li.18a1-2)

- (8) 仏教では、例外的に、因縁によって生じな⁴「無為法 *asamskṛta-dharma*」と⁵いうものを説いている。涅槃(*niḥśreyasa*)や虚空などがそれにあたる。

- (9) 『撰大乘論』では、「二分依他」について次のように説明している。他に依る実存〔「依他起性」の中に妄想された実存〔「遍計所執性」〕があり、汚染 (*kun nas nyon mongs pa/samkleśa*) に属する。〔また、他に依る実存の中に〕完全に成就した実存〔「円成実性」〕もあって、清淨 (*man par byang ba/kyavādāna*) に属する。かの他に依る〔実存〕そのものは、それら二つに属しており、この二つを意図して、世尊は説かれた。(D4048.r1.19b6-7, P5549.li.22a8-b1)

《略号》

RR : Hilary Putnam, *Realism And Reason, Philosophical Papers* ; Volume3, Cambridge University Press, 1983.

邦訳 ヒラリー・パトナム 『实在論と理性』飯田隆他訳、勁草書房、一九九二年。

RTH : Hilary Putnam, *Reason, Truth And History*. Cambridge University Press, 1981.

邦訳 ヒラリー・パトナム 『理性・真理・歴史』野本和幸他訳、法政大学出版局、一九九四年

D : sDe dge ed. (チベット大蔵経デルゲ版)
P : Peking ed. (チベット大蔵経北京版)

なお、本論で引用した『撰大乘論』のチベット訳については、sDe dge ed. ʘ Tibetan Tripiṭaka, bstan 'gyur, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo, 1980-1981 を用い、また Peking ed. は影印西蔵大蔵経(大谷大学監修、西蔵大蔵経研究者編集、昭和三年)を用いた。

(こんどう・しんすけ、唯識・比較思想、佛教学大学研究員)